NPO法人・越谷市郷土研究会

第３７５回　史跡めぐり

伊興七福神を詣でる

日　　時　平成２０年１月３日（木）

集合場所　越谷駅東口　午前９時集合

コ ー ス（現地徒歩距離　約５キロ）

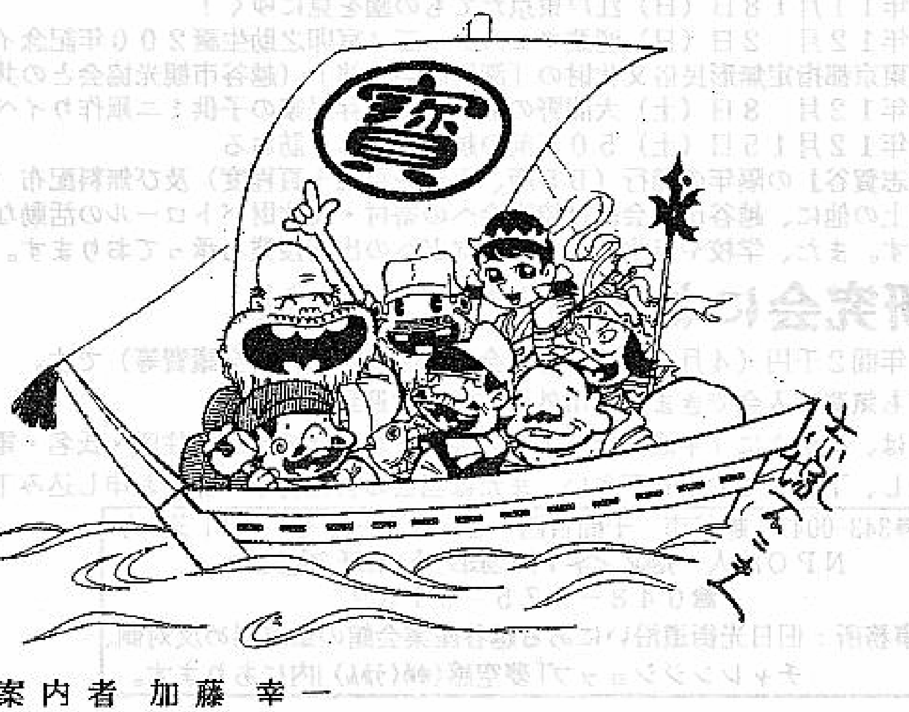
越谷駅→竹ノ塚駅→白幡塚古墳→旧・やじった堤（毛長川の堤の跡）

→法受寺（布袋）→旧・王子道→正安寺（七福神堂）→旧・王子道

→東岳寺（広重の墓と記念碑）→観音橋の跡地→王子道に残る庚申塔

→旧・王子道→実相院（弁天、大黒、毘沙門）→福壽院（寿老人、福禄寿）

→「七曲がり」道→源正寺（恵比寿）→竹ノ塚駅（12時・解散）



案内者　加藤　幸一

七福神信仰

加藤幸一

〔七福神のおこり〕

将軍徳川家康が 天海僧正（家康の信頼を受け 家康の政治を助ける．二代及び三代将軍にも仕える．日光東照宮を建てたり 上野の寛永寺を建てたりした．伝えでは 数え年108歳まで生きたという）に

「国が栄えるようになり 人徳がたかまるようにするには どのような道が大切であろうか」

と質問されたのに対し、僧正は

「仁王経などの経典に説かれている教えを大切にすれば 七難即滅し、七福即生します」（仁王経に「七難即滅 七福即生」のことばがある．）

と答えた．

さらに家康は

「七福とは なにか」

僧正は

「七福とは 寿命、有福、人望、清廉、威光、愛敬、大量であります」

と答え この七つの福徳が 人生にとって 大切であることを説明した．そこで家康は 早速 狩野派の画家に 七福の神々を画かせた。

七福神は 七難（仁王経によると 日月の難、星宿の難、火災の難、水害の難、風害の難、旱魃の難、戦乱盗賊の難の七つ）を除き 七福（寿老神の寿命、大黒天の有福、恵比須神の人望、布袋尊の清廉、毘沙門天の威光、弁財天の愛敬、福禄寿の大量の七つ）を与える神々、つまり仁王経に説く「七難即滅 七福即生」の神々とされるようになった．

このように 七福神の神々は 家康と天海僧正の問答から生まれたとの伝えがあるが 七種類の福神が民間信仰としてあらわれてきたのは それよりずっと以前の室町時代終り頃からとも推定されている．

参考にした主な本
「深川七福神」（深川七福神会）
「大日本百科事典」（小学館）
その他

〔宝船〕

七福神は　最初、七福神を宝船に乗せた絵から一般にひろまったと考えられている。江戸時代初期から七福神を乗せた宝船の絵を　正月二日、枕の下に入れて寝ると　吉夢（めでたい夢）を見るということが　さかんにおこなわれるようになった。宝船のことを「おたから」といい、正月二日、おたからを江戸の町に売り歩くのを　お宝売りといって、お宝売りの呼び声が町中に賑わった。

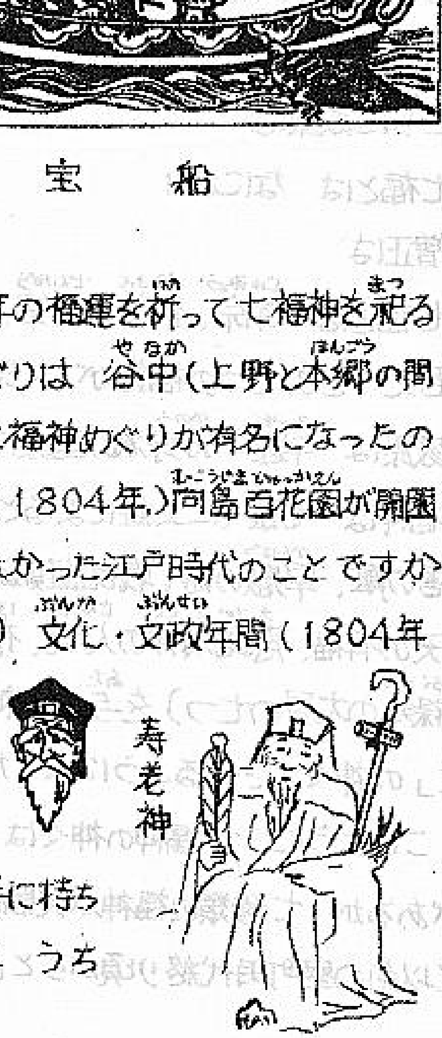
この宝船の絵に「ながきよの　とをのねぶりの　みなめざめ　なみのりぶねの　おとのよきかな」（長き夜の遠の眠りの皆目ざめ波乗り船の音のよきかな）という五七五七七の短歌を書き添えている。この短歌は　上から詠んでも　下から詠んでも同じ文となる回文である。聖徳太子の作との伝えがある。

宝　船

〔七福神巡り（七福神詣で）〕

七福神めぐりとは　元日から七日頃まで　その年の福運を祈って七福神を祀る神社や寺院を巡拝することである。この七福神めぐりは　谷中（上野と本郷の間にある）の七福神めぐりが最初といわれている。七福神めぐりが有名になったのは　隅田川の七福神めぐりで　これは　文化元年（1804年）向島百花園が開園されてから始まった。今と違ってたいした娯楽もなかった江戸時代のことですから　物見遊山を兼ねた七福神詣でが　各地に始まり　文化・文政年間（1804年〜1829年）の頃から特にさかんとなった。

〔七福神〕



寿老神（長寿の神さま）

寿老神は　白髪長寿の老人の姿をして　杖を左手に持ち　杖には人命の長寿を記した巻物を吊し　右手には　うちわを持ち　鹿を伴っている。

鹿は　長寿を司る寿老神の使いとされている。

寿老神は　人に延命長寿の福徳を授ける福神として　信仰されてきた。

大黒天

大黒天は　ずきんをかぶり、狩衣を着て、右手に打出の小槌を持ち、左手には左肩にかけて大きな袋をかつぎ、米俵の上を踏まえる。

小槌と袋は限りない財宝や食糧を蔵していることをあらわしている。人々に財宝を授ける福神である。米俵に縁のあるところから　鼠が大黒天の使いとなっている。初甲子（初大黒ともいう。子は　ねずみのこと）は　一月の最初に来る甲子の日をいい、大黒天の祭日となっている。また　わが国の大国主命と結びついて民間信仰に滲透し、「えびす」と共に台所などに祭られる。

大黒天　　恵比須神　　布袋尊

恵比須神

恵比須神は　顔は笑顔をみせ（これをエビス顔という）、烏帽子をかぶり、狩衣を着て、右手に釣竿を持ち　左手に釣りあげた鯛を抱き、岩の上に坐っている。三歳まで足がたたず不具であったという。また釣好きの神であるともいわれている。最初は　航海安全の神として信仰されてきたが　のち商売繁盛の神として　ひろく信仰されるようになる。また釣り関係の人々の信仰もみられる。1月10日が　初恵比須、十日戎ともいい、兵庫県の西宮恵比須神社を中心として　関西に　戎信仰がさかん。商売繁盛を祝福して恵比須神を祭り　親類・知人を招いて祝宴を開く恵比須講がおこなわれる。

布袋尊

布袋尊は 大きな布の袋を持ち、大きな団扇を手にし、身体は低いが 腹を露出した太鼓腹（この腹を 布袋腹という）、粗末な衣服をまとい、常に笑顔を忘れない。清廉潔白、大気度量（おおようなこと）を人々に授ける福神として信仰され、禅画や置物にまでなって親しまれている。

毘沙門天

毘沙門天は 多聞天ともいい、甲冑をつけ、片手に宝塔を捧げ もう片方には三つ叉の鉾を持ち 忿怒の相をなしている。毘沙門天は 上杉謙信（戦国時代の武将）が毘沙門天を守護神とするなど 古来武将が信仰したもの。大和信貴山の毘沙門天や京都鞍馬山の毘沙門天は有名。
七福神の毘沙門天は 人に勇気、決断力を与え、財福を与える施福の神として信仰されてきた。

弁財天

弁財天（弁天さま）は 七福神の中で唯一の女性の神で 白色の美顔、頭に宝冠、一般には青色の衣を着て 左手には琵琶を抱き、右手でこれを弾いている座像が多い。中には腕が8本あって左手に弓・刀・斧・羂索を 右手に箭・三鈷戟・独鈷杵・輪宝を持つものもある。古来、安芸の宮島、近江の竹生島、相模の江ノ島の弁財天などが有名。財宝を施す福の神として信仰され、また芸道音楽の仏神として位置ずけられ、池、川、沼、湖などに中島を作って そこに祭られ、蛇が 弁財天の使いとされてきた。
正月最初の巳の日を昔から初巳、初弁天として 弁財天への参詣者が多い。巳成金という開運のお守りを受ける。

福禄寿

福禄寿は 背が低く 頭がきわめて長く 白髪童顔で髯多く 巻物を結びつけた杖を右手に、わきには長命の鳥である鶴を従える。長命と円満な人格を授ける福神。また 福（幸福）と禄（高給）と寿（長命）を授ける福神とも。

〔七福神のおいたち〕

七福神は 生いたちも性格もかなり違う種々雑多な神々の寄せ集めといえる。

寿老神

寿老人とも書き、もと中国の宋代、元祐年間（1086～93）の人と伝えられる。寿星（カノープスの中国名）の化身という。南極星の化身である福禄寿と似た性格を持ち 混同されやすい。福禄寿と同体異名であるともいわれる。また 一説に 中国の老子（中国の道教を開いた人）の化身とも伝えられる。

大黒天

大黒天信仰に二つの流れがある。一つは インド名をマハーカーラという仏神の大黒天、すなわち 摩訶迦羅天で これは多くは寺院にまつられている。一つは 大黒天を 実は大国主命であるとする流れで これは多くは神社にまつられている。中世、大黒天は 大国主命と音が似ていることから混同されたのである。大黒信仰の流布にもっとも大きな役割を果たしたのが 正月などに大黒の面や頭巾をかぶって家々を訪れ、めでたい詞をとなえながら大黒舞を舞う門付芸人であった。

恵比寿神

恵比須神は もと兵庫県西宮市の西宮恵比須神社の祭神である蛭子尊（伊弉諾尊の第三子）であるといわれる。また 一説には 大国主命の子にあたる事代主尊であるともいわれる。

恵比須信仰は 初め 漁業に関係する神として漁民の間でおこなわれていたものが 後に 都市や農山村に普及していったのである. タイを釣りあげている姿となっているのは 元来 漁民の間の信仰から成長したことを物語っている. 農村では 大黒天と並べて恵比須神をあがめ 福がくることを願い、都市では 商売繁盛の神として 商家などで夷講をおこなったりしている.

布袋尊

中国唐代の契此という名の禅僧といわれる. 杖と大きな袋を持って諸国をめぐり 喜捨(進んでほどこしものをすること)を求め歩いたという. 子供と遊び楽天的な和尚として知られた. そこで世人は 契此を 弥勒菩薩の化身であるとして尊び その円満の相は 好画題として画像に描かれたり、彫刻や塑像に刻まれたりして ひろく親しまれた. わが国では七福神の一人となり 禅画や置物としても親しまれている.

毘沙門天

毘沙門天は 古代インドの神で インド名をバイスラバンナという. 説法をよく聞くことから 多聞天ともいう. 多聞天は 四天王の一つで、須彌山(仏教で 世界の中心にあるという高山)の中腹にあって 北方を守り 仏法を守護する仏神である.

弁財天

弁財天は 古代インドの神. 聖河の化身という. 川の神である. 川の流れの音から音楽の神とも弁舌の神ともなる. また 弁才天とせず 弁財天と書いて財宝を与える福の神ともなる. また 吉祥天と混同されたり 穀物の神である宇賀神と同一視されたりする.

福禄寿

福禄寿は 中国では 南極星(南十字星)の化身といわれている. 一説には. 中国宋代に実在した道士(道教を修めた人)であるともいわれている.

『伊興七福神を詣でる』

白幡塚古墳（しらはたづか）

古墳時代の墓である。この塚には次のような言い伝えが残っている。

平安時代のことである。源頼義と源義家の親子が京都から奥州（今の東北地方）にいる安倍氏の征伐に行く途中、ここで地元の敵と戦った。そして勝利して、この塚に源氏の旗である白旗を立ててなびかせたという。

開設当初の竹ノ塚駅があった場所

東武鉄道が千住と久喜間に明治三十二年（一八九九）に開通した。竹ノ塚駅は、その翌年、明治三十三年（一九〇〇）に開設された。当初はここより北方の白旗塚古墳の近く、当時の田圃の中、西保木間一七－四の地に作られた。それが開設して数年後、現在地、伊興町一三三三番地に移転してきたのが現在の竹ノ塚駅である（明治四十年代にはすでに現在地に移転していると思われる）。それゆえ駅名としては、伊興の地に移転してきたことから「伊興駅」と名称を変更するのがふさわしかったと思われる。「伊興駅」と変えていれば伊興の地名はとても有名になったことであろう。

なお、竹ノ塚駅の駅名の言われは、地元の田中正次氏（伊興本町二－五－四〇）によると、ここに竹ノ塚と呼ばれた古墳があったからである。

谷下堤（やじたづつみ）

伊興の氷川神社の前を東西に走っている道を「谷下堤」と地元では呼ばれた。この道は、昔は毛長川の洪水を防ぐための堤防で、人が通れなかった。しかし、江戸時代の終わり頃に、堤の上を人が歩けるようにと工事が行われ、道路として利用されるようになり、今日に至った。

なお、この堤と毛長川との間の河川敷きは、耕地名が「谷下」と呼ばれている地域で、田圃が広がっていた。

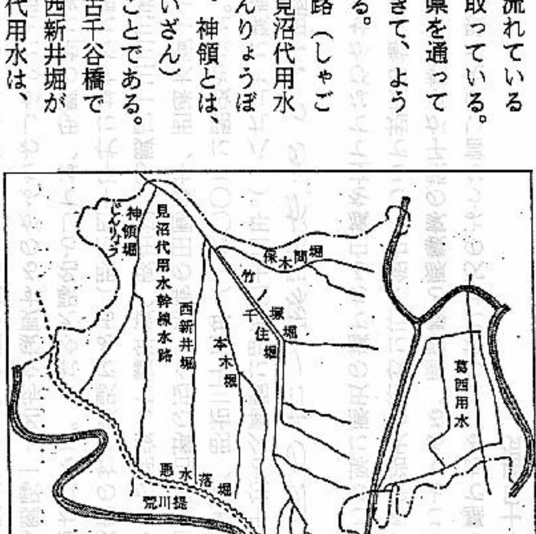
見沼代用水の
保木間堀と竹ノ塚堀・千住堀

見沼代用水は、お米を作るための農業用水としてとても大切であった。今では、舎人（とねり）水門から古千谷（こじや）橋までの用水路は、

「見沼代用水親水公園」としてきれいに整備されている。

見沼代用水は、埼玉県と群馬県の県境を流れている利根川から水を取っている。利根川から埼玉県を通ってはるばる流れてきて、ようやく足立区に入る。

今はなき砂子路（しゃごじ）橋あたりで見沼代用水から神領堀（じんりょうぼり）が分かれる。神領とは、東叡山（とうえいざん）寛永寺の領土のことである。次にその下流の古千谷橋で見沼代用水から西新井堀が分かれる。見沼代用水は、さらに下流の榛ノ木（はんのき）橋まで流れる。榛ノ木橋からは名前が変わり、保木間（ほきま）堀と竹ノ塚堀・千住堀・本木（もとき）堀の四つの用水に分かれて流れる。



用水路要図

谷下堤に沿って流れているのが保木間堀で、赤山街道に沿って流れているのが竹ノ塚堀（東側）と千住堀（西側）である。

《見沼代用水とは》

江戸時代の初め頃、農業用水を確保するための大きな溜め池が寛永六年（一六二九）に関東郡代の伊奈忠治によって完成した。これが「見沼溜井」と呼ばれ、現在の埼玉県から東京都足立区までの耕地に利用された。

しかし、八代将軍吉宗の「享保の改革」の一環として、「見沼溜井」も干拓し、田畑とすることが決定された。

そこで享保十三年（一七二八）、吉宗に従い、紀州より幕臣として仕えた井澤弥惣兵衛為永（いざわ・やそべえ・ためなが）によって、「見沼溜井に代わる農業用水」、すなわち「見沼代用水」が完成し、埼玉県行田市の

利根川より取水し、埼玉県をほぼ南北に貫いて、舎人から足立区に入り、田畑を潤していた。

法受寺（布袋）

五代将軍徳川綱吉を産んだ母である桂昌院の墓がある。墓石には『桂昌院殿従一位仁誉興国恵光大姉』と戒名が何と十五文字も刻まれている。

また「牡丹灯籠」のゆかりの寺である。芝居で「牡丹灯籠」を演じる役者は演じる前にお参りにくるそうである。

王子道

王子道は、東京都北区にある王子稲荷や王子権現（王子神社）に通じる道である。実相院（伊興四－一五－一一）と福寿院（伊興二－一八－一八）の間を通る道が王子道である。北の方は、赤山街道にある市川屋酒店に向けて道なりに進み、赤山街道を横断してゴルフ場の西側を通り、谷塚橋、そして安行方面へ向かう道である。「安行街道」とも呼ばれた。

正安寺（七福神堂）

第五代将軍徳川綱吉の母からいただいた釈迦涅槃像が安置されていて、「安楽往生の寺」として有名である。

赤山街道

赤山街道（赤山道）は、赤山領赤山（現在の川口市赤山）まで通じる街道である。赤山は、赤芝山を略して名付けられたものである。

赤山には、関東郡代伊奈氏の赤山陣屋があり、陣屋までの宿（しゅく）継ぎで賑わった。街道名は、赤山陣屋に由来する。陣屋とは、郡代や代官のすまいのことである。

赤山陣屋には四つの門がある。北の方は石神口門、東北の方は越ケ谷口門、東の方は安行・領家口門、南の方は鳩ケ谷口門である。その門からそれぞれ伸びる行政の道が赤山街道と称されるようになったという。各地の村の年貢はこの道を通って赤山陣屋に運ばれたのである。越谷にある赤山街道（鳩ケ谷道）もその一つである。

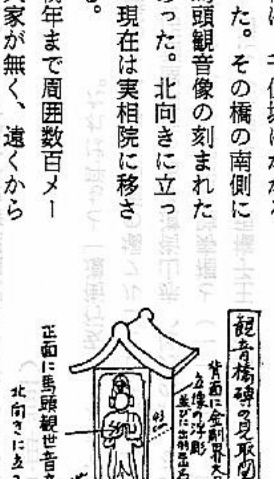
赤山街道の竹ノ塚堀と千住堀

赤山街道に沿って道路東側は竹ノ塚堀、西側は千住堀が流れていた。「見沼代用水の保木間堀と竹ノ塚堀・千住堀」を参照のこと。

東岳寺

江戸時代終わり頃の浮世絵師、歌川広重（安藤広重）の墓と記念碑がある。広重の浮世絵を世界に紹介したアメリカ人ハッパーの墓もある。

観音橋の馬頭観音石仏



観音橋は、千住堀にかかる橋であった。その橋の南側に正面が馬頭観音像の刻まれた石仏があった。北向きに立っていた。現在は実相院に移されている。

明治初年まで周囲数百メートルは人家が無く、遠くからも見つけやすかったので、他村から伊興の観音様にお参りに来る際のよき道しるべとなっていた。

観音橋の名のいわれは、他村からの参詣が絶えない観音堂（子育て観音）に通じる道であったからであろう。

王子道に残る庚申塔

庚申塔とは庚申信仰の記念として建てられた石仏（せきぶつ）である。人間の体の中に潜んでいる三匹の尸虫、三尸虫(さんしちゅう)が、六十日に一度やってくる干支(えと)の庚申の日の夜に、人の睡眠中に口から抜け出して天に昇り、その人が日頃犯した罪を天の神に暴く。するとその報告をもとに判断して、それに応じて命を縮めて若死にさせたりする。それゆえ庚申の日の夜は三尸虫が身体から抜け出る機会を与えないように寝てはならないという。そこで、庚申講の仲間達が一堂に会し、徹夜して過ごす行事が行われる。その行事の記念として建立された石塔が庚申塔である。

庚申塔は、青面金剛(せいめんこんごう)の像容を刻んだものと、「青面

金剛」とか「庚申塔」と文字で刻んだものとがある。どちらも「見ざる・聞かざる・言わざる」の三猿(さんえん)が必ず刻まれている。

青面金剛は庚申塔の本尊で、怖い顔をし、手が六本あり、それぞれにさまざまな武器を持ち、足元に鬼を踏み潰している仏様である。

六万部経塚（きょうづか）

地元では、この塚を土地訛りで「ロクマンボ」と呼ばれてきた。解説板に次のように紹介されている。

> 六万部とは、法華経二十八品を繰り返し六万回にわたって唱える意味で「六万部経塚」の名の由来もここにある。
>
> 寿福山長勝寺の第一世智性院日座聖人は千七百五（宝永二年）国土の平和と皇室の行く末の平安とこの土地の住民並に壇信徒の末永き幸せを祈願し、小石に題目を書写してこの土地に埋めたとされる。日座聖人と聖人が始めた題目講の信徒は昼夜の別なく法華経を読誦し、その法聲は周囲に響き渡って、多くのものの信仰を集めることになったという。
>
> 以来、土地のものは、この地を「六万部」と称し、諸願の達成を祈るところとなった。
>
> 古くからある塚碑には「宝永二年霜月十三日、立」とある。
>
> （後略）
>
> 平成三年十月十三日
>
> 壽福山長勝寺第四十二世
>
> 飯島玄明記

なお、「六万部経塚」の題目の石塔の表面はかなり痛んでいるが、ここに刻まれた文字は次の通りである。（解読・加藤幸一）

六万部経塚の題目塔

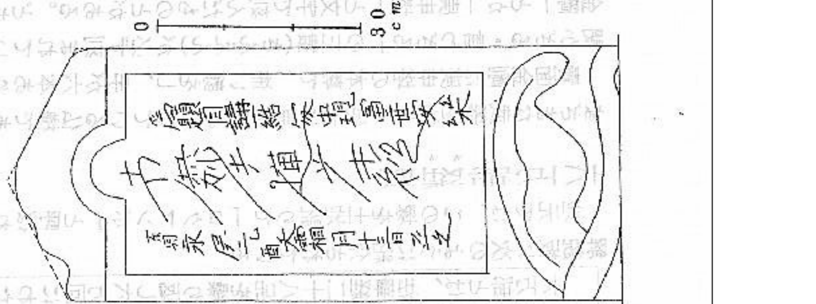
所在地　足立区伊興三丁目（七曲がりの道路沿い）
石塔型式　板碑型（北西向き・高さは九〇センチ）
年号　宝永二年（一七〇五）

［正面］

『為題目講一結□中現當二世安樂（處ヵ）

南無妙法蓮華経（立ヵ）

寶永□二乙酉天霜月十三日□之』※「天」は「年」の代わりに用いられる。



六万部経塚の題目塔

スケッチ　加藤幸一

お千葉さま（千葉次郎勝胤（かつたね））の墓

地元では敬意を込めて「お千葉様」と呼び、かつての領主様を誇りにしてきた。このあたりは、かつては「千葉屋敷」と呼ばれたという。また、お千葉さまは、この墓石の近くのモロコシ畑で討ち死にしたとの言い伝えが残っているという。長勝寺がこの墓石を管理している。

なお、この墓石は最近になって長勝寺に移され、現在地には今はない。説明板によると次の通りである。

> 千葉次郎勝胤の墓
>
> 下総国千葉庄(現在の千葉県千葉市付近)本拠地とした武士団千葉氏は、鎌倉幕府の開設にも重要な役割を果たし、中世を通じて房総地方に勢力を誇った。
>
> 十五世紀のなかばに関東で起こった享徳の乱により、千葉氏一族は内部分裂し、嫡流は武蔵東南部に拠点を移した。これを武蔵千葉氏という。後に戦国大名小田原北条氏の家臣に組み入れられた。永禄二年（一五五二）に北条氏が家臣の果たすべき負担を当時の貫高（かんだか）に所領地名を付けて表した「北条氏所領役帳」には、千葉氏は足立周辺で淵江、伊興、保木間、沼田、千住、三俣（みつまた）などを領していたことが記されている。
>
> 千葉勝胤は武蔵千葉氏の系図にはその名は見えず、この墓の造立年月日も不明であるが、嫡流あるいは伊興を領有していた一族と思われる。宮城、市原、常田（ときた）氏等の伊興の旧家の名も銘記されており、中世の武蔵千葉氏の存を伝える貴重な歴史資料である。

平成六年三月　東京都足立区教育委員会

《千葉勝胤に関する詳細》

千葉勝胤は、文明三年（一四七一）に千葉孝胤の子として生まれ、千葉郡に住んで千葉氏を名乗った初代平常将（つねまさ）より二十一代となるという。天文二年（一五三三、一説に天文元年）、六十三歳で没しているが、その生涯については謎である。佐倉城主となり、小田原城を根拠地とする後北条氏と婚を結び、後北条氏に従い、お家の安泰をはかったという。詳らかではない。佐野新田の佐野家はそのお千葉様の後裔であるという。

この墓を建てた者が、宮城三右衛門、市原四郎兵衛、宮城忠左衛門、常田次郎左衛門とあり、氏姓から足立在住の在地家臣たちの建てた勝胤の供養碑と思われるという。今でも、当時の家臣であった宮城家や常田家が江戸時代に名主を代々勤めた伊興の旧家として残っていて、主君の霊をお守りしているという。

なお、足立区本木にある中曽根神社周辺は、千葉氏居城の跡といわれ、周囲には堀をめぐらしていたという。また、保木間の渕江小学校東隣の氷川神社のあたりは千葉氏の陣屋の跡であるといわれ、千葉氏とゆかりのある妙見社がそこにあったという。隣の宝積院（ほうしゃくいん）の山号は、その妙見（北斗星）にちなんで北斗山という。

このように足立区は武蔵千葉氏と縁が深いのである。

実相院（じっそういん）（弁天、大黒、毘沙門）

「伊興の子育て観音」「伊興の観音様」として有名な寺院である。江戸時代から、母乳の出ない婦人の信仰が厚く、参詣人が絶えなかったという。本尊の観音像は、中世の一木造（いちぼくづくり）の作で、都の文化財に指定され、十二年に一度の午年の四月にしか開帳されない秘仏でもある。

また、実相院は「武蔵国三十三箇所観音霊場」の第二十三番である。第二十七番から第三十一番は、越谷市にある寺院である。

この観音霊場めぐりの、仮名で書かれた五七五七七の御詠歌を解読して漢字混じりの文になおした資料を別紙で紹介したのでご参考願いたい。

なお実相院の裏の伊興小学校は、元は伊興村の役場があった所である。

福寿院（ふくじゅいん）（寿老人、福禄寿）

本尊は不動明王。荒綾八十八箇所弘法大師霊場の第四十五番札所として江戸時代に栄えた。明治七年（一八七四）に、境内に公立新井学校の四番分校として設立された。後の伊興小学校の発祥の地といえる。昭和二十年（一九四五）にB29の空襲で全焼したが、戦後、復興している。

実相院の大門と大木の跡地

「子育て観音」で知られる実相院は、昔は寺域が広く、現在ある門から道路沿いに南へ七、八十メートルの所に「大門」と呼ばれる山門があった。すぐそばには「大門」と呼ばれる屋号の家が今でもある。地元では「でえもん」となまって発音していた。

この大門わきに、今はなき一本の大木があった。幹回りは、七、八人の子供が手をつないだくらいあった。木の中心部は空洞化していた。

この大木には次の言い伝えがある。康平六年（一〇六三）、源頼義、義家父子が、奥州の安倍一族の反乱を鎮めるために、伊興の地を通りかかり、宿陣先の地元の応現寺にて、伊興観音に戦勝の祈願をした。そして大門付近で食事をする時に箸がなかったので、そのあたりに生えている木の枝を折って箸代わりに使った。その箸を植えて生長したのがこの大木であるという。

この大木を地元では「欅（けやき）」と呼んでいた。「足立百の語り伝え」（足立区教育委員会）では「大榎（おおえのき）」となっている。

七曲（なまま）がり

曲がりくねった道であるので、地元では「七曲がり」と呼ばれている。「七」は、多いという意味であろう。古くからの道は、曲がりくねっているのが普通である。七曲がり道とか、蛇道（へびみち）とか呼ばれそうな道に対して、まっすぐな道は新しく作られた道ではないかと思ってもよい。

源正寺（恵比寿）

本尊は阿弥陀如来。寺伝によると、天文二十年（一五五一）、村民らが寄進した阿弥陀如来像を本尊として本堂を改築。真言宗に改宗し、玄性寺を源正寺に改名したという。

※第三七五回の史跡めぐりは、伊興の七福神詣でに触れながら、竹ノ塚駅西口方面の伊興の歴史を少しでも知ってもらおうと企画しました。
ご参考になればありがたく存じます。

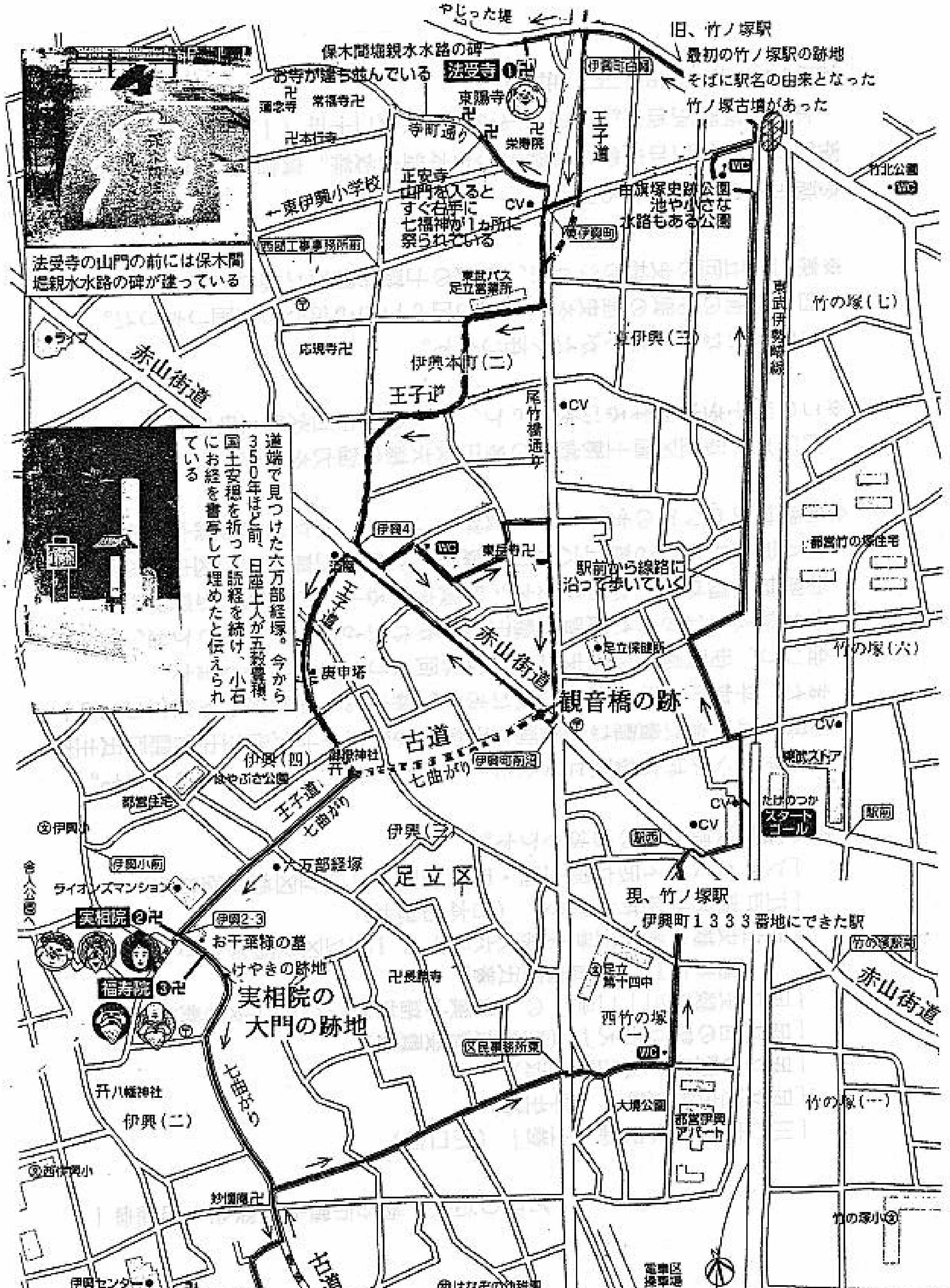
※この冊子を作成するにあたって、地元の田中正次様（伊興本町二－五－四〇）、足立区郷土博物館の多田文夫様の協力を得ました。

※伊興村についてのまとまった資料としては、足立史談の第六五号（昭和四八年七月）から第九六号に掲載された連載記事「足立区史跡めぐり・伊興村を訪ねて」があります。伊興を知る上での客観的な資料です。今は故人となられた須賀源蔵氏が書かれたものです。かつては、直接お会いし、伊興周辺の歴史についてお伺いしたことがあります。
また、平成十五年に越谷市内にある、幕末より中村家代々当主によって収集されてきた貴重な古書画を所蔵する第二十七代当主中村顯司氏主宰の「サロン中村古書画コレクション」にご案内したこともあります。

※主な参考文献は次のとおりです。

「ブックレット足立風土記・伊興地区」（足立区教育委員会）
「江戸東京七福神めぐり」（日本出版社）
「足立史談の第六五号～第九六号」の『足立区史跡めぐり・伊興村を訪ねて』（須賀源蔵氏著）
「足立史談第三一二号」の『伊興七福神めぐり』（安藤義雄氏著）
「足立百の語り伝え」（足立教育委員会）
「足立の歴史」（名著出版）
「足立区史跡散歩」（学生社）
「川口市史・通史編・上巻」（川口市）

ＮＰＯ法人・越谷市郷土研究会　加藤幸一



※『江戸東京七福神めぐり』(日本出版社)に掲載された地図を利用しました。